

④4516<sup>P-1/2</sup>

同文  
241<sup>P</sup>

4260<sup>P-2/3</sup>同文  
4632<sup>P</sup>  
4505<sup>P</sup>同文

（二）新頁。ついに即位されることになる

4,550<sup>P</sup>

# 第百四十四章 天智天皇

## 天智天皇即位

天智天皇は、即位された。

それは、天智称制六年（六六七）三月の二

とであつたろう、と思われ。

なお、すでに述べたとおり、天智紀七年条

には

「七年正月三日、皇太子即天皇位す。成

本に云はく、六年の三月に、位に即きたま

ふ

「世の第百三編」天智朝の二人の天皇

とある。（第七十九章、舒明天皇へ譲位✓。

第八十三章、高市天皇へ元年正月三日即位✓

の項において既述）

とすれば、七年正月三日に、皇太子即天

皇位すという記事については、どう解釈し

たらよいのだろうか。

なかなか理解しにくいところであるが、こ

の物語では大略次のような経緯を考えてみる

ことといたし。（一部重複）

天智六年（六六七）三月に天智天皇が即位



日本書紀 945 源高明 (西宮記) 西宮天皇の皇子 (源周子の子) 小野小町のひまごか? 日  
 懐風藻 68 紀下 586 注 3 4,551

紀下 368 末 457

さ小たのと同時か、あるいはあまり時を経た  
 頃、大友皇子(天智天皇の長子)を皇太  
 子とさ小た。

②その翌年の天智祚制七年正月三日に、皇太  
 子大友皇子が皇位におつきになつた。  
 ③天智祚制六年に引き続いて、七年

にも天皇即位の礼かとり行なわれ、  
 に又、二朝時代が復活したのであろう。  
 ④あるいは、

へ天智天皇は東の天皇になられ、大友皇子  
 は西の遠の朝廷の天皇となられた。

なるほど、大友皇子の立太子・即位に関し  
 て、日本書紀は何も述べていない。

懐風藻は大友皇子のことを皇太子と記載し  
 ており、また前田家本西宮記裏書をはいめ、  
 平安時代以降のいくつかの史料に、大友皇子  
 の即位を記している。(日本書紀に)

注二八一三参照  
 日本書紀は、万世一系の思想を貫くため

権臣の陰謀  
 おりといふ  
 権臣といふ



4,552<sup>P</sup>

ニ

二朝時代の一方の天皇  
にフリて、一切の語らぬことによりたのであ  
ろ。

米



日本史辞典 677頁  
「天智天皇の即位」の二とある

帝記: 天智5<sup>1</sup>略略もに無、大カワに無(2)  
天智36<sup>7</sup>上巻3

4,553<sup>1</sup>-1/2

④4559<sup>1</sup>同反

④4634<sup>1</sup>

おうみ 近江大津宮

# 大津宮

■天智称制六年(六六七)三月に即位された

天智天皇は、——その同月三月の十九日に

都を、近江国の大津に相当する筑紫国の

都大津に定められたのであろう。

■天智称制六年三月十九日条に、こう記さ

れてゐる。

「都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓

都遷すことを願はむして、諷へ諫く者多し。

童謡亦衆し。曰日夜夜、失火の危多し」

という。

■なお、帝記は、

「天智天皇の口定都<sup>と</sup>と、曰即位<sup>と</sup>とを、

すぐに続けて述べている」

という。へ「日本書紀」(下)日本古典文学大系

岩波書店、三六七頁、注三一参照

■この物語では、る直前<sup>ちかきまへ</sup>もしくは

へ天智天皇は、即位された直後に、都を筑



④4549<sup>P</sup>

万1-27<sup>P</sup>  
紀F581<sup>P</sup>注9

4.553<sup>P-2/2</sup> 改行

紀F581<sup>P</sup>注9

「ヒニ32」④4582<sup>P</sup>

OK

紫国のなのおほつ姫大津に定められた  
と考えてみた。い。

＊

ところ、我々は通常、おうみのおおつのみ近江大津宮と  
称してゐる。

一かし、十年十一月条

紀F 380 79

「天智紀にはあふみのみ近江宮とあり、天武紀元年  
条にはあふみのみ近江朝廷・あふみのみ近江京・あふみのみ近江大津  
とある。持統紀六年条には「あふみのみ」めてあふみのみ近江大津

宮の語があり、万巻一・二九のふたへん柿本人麿の  
歌にささなみ楽浪のおほつのみ大津宮の句があり、のちあふみのみ大  
津宮の称が普通に用ゐられるようになった。

という。(「日本書紀」(F)日本古典文学大系

岩波書店、五八一頁、補注二七一九参照)

日本書紀の編纂者達は、

へなのおほつのみ姫大津宮もあふみのみ大宰府も区別せず

あえて、あふみのみ近江宮・あふみのみ近江朝廷・あふみのみ近江京

とあふみのみ近江大津宮などと称したのであろう。

と思われ。

＊

5



さて、歴史的にみると、国家の重大事に直  
面した時、我が国古代の歴代天皇は常に自ら  
進んで事行動された。

御肇國天皇（崇神天皇）→成務天皇・仲哀

天皇・神功皇后・応神天皇・仁徳天皇→継体

天皇、そしてさらに以後の全ての天皇もまた

決して逃げ腰ではなかった。事に臨んでは、

果敢に立ち向かって、決然と対処されたのであ

った。

この当時、白村江で百濟・日

本軍に大勝した唐・新羅の連合軍が、その勢

いに乗って、いつ日本へ襲いかかって来るか

も知れない、まさに緊迫した状況下にあつた

日本国中に、極度なまでの危機感の高まり

があつた。

そこで、敵の襲撃を必至とみて、次から次

へと、対策が立てられていった。

そんな時、都が近江に遷されたのである。

なるほど、従来、疑うこともなく、日本書



4,555<sup>P</sup>

おきけつ  
怖気付く 店 299<sup>P</sup> ぶき 店 2294<sup>P</sup>  
(赤印) ② 238<sup>P</sup> - 2/2

朝日 年25 (2013) 10, 9  
朝日新聞の語彙とその意味

紀四の記述に沿って、  
唐・新羅連合軍の来襲に備え、皇太子中大兄は、大和国よりもさらに奥まった近江国へ都を遷された。  
と考えられてきた。  
一見、もっとも思うべく思われる。  
しかし、中大兄は性格的に人一倍負けず嫌いであったようである。それなのに、何となく何となくその中大兄が、すっかり怖気付き、瀬戸内海の奥の大和国に居てもなお不安だから、大和国よりもずっと奥に位置する近江国へ都を遷された。――  
などということが有り得るだろうか、と疑問に思われる。  
また皇太子中大兄は、自ら近江国へ都を遷したその弱みを隠し、取り繕うため翌年の天智元年正月三日、天皇位に即したためであろうか。  
いや、そんな筈はあるまい。  
六十一歳となられた高麗の女帝、天明天皇さへ、  
天明七年（六六一）正月六日、自ら



ミロ  
鼓舞 元 826P  
危機 元 4554 15P

4,556P

ミロ  
気概 元 514P

ミロ  
引き籠る 元 1854P  
到底 元 1575P  
果敢 元 374P  
4462-1/2

果敢にも難波から御船西征されたい  
うのくに、齊明天皇の子である天智天皇  
か、近江国（滋賀県）に引き籠ってしまわ  
たなどとは、到底考えにくい  
恐らく、天智称制元年三月に天皇位につか  
れた天智天皇は、  
へ即位されたその同じ三月に、玄海灘を挟  
んで朝鮮半島と対峙している筑紫国の日  
津に都を遷され、自ら立つて陣頭指  
揮し、この難局を乗り切ろうとされた  
のであろう、と思われる。  
へ唐や新羅よ。かかって来りかよい  
といった気概さえ感じさせる遷都であらう。  
とはいえ、博多湾に面した那大津に都を置  
くというとは、あまりにも無謀なことであ  
不安を抱く人々は  
へ最前線ともいうべき那大津宮に居られ  
は、我が日本軍を鼓舞することにはなろう。  
しかし、唐・新羅軍に攻撃されたとき  
ひとたまりもあるまい

毛征西紀下 348



にわい 元  
地割 1139P

4.557P-1/2

てんふ 元1553P  
天賦 天賦の要害をなし、  
要害 元2267P

てんふ 天然の要害をなし、

ゆうりや  
元2251P

と憂慮され、たに違いない。

■ それではどうすべしだろうか。

■ トル 天智天皇は、次のようにお考えに

なされたように想像される。

《たしかに、<sup>なのおほののみや</sup> 娜大津宮はあまりにも海岸に近す

ぎる。海上から大艦隊が襲ってきた時、防ぎよ

うもなく陥落するかも知れない。どこに

か、都とするのに相応しい所はないか。

■ 〆て天智天皇は、<sup>おほの</sup> 日大野城、<sup>みづき</sup> 日水城、

・ 日椋城で囲まれた<sup>てんふ</sup> 天府の要害の地と<sup>い</sup> い

う、<sup>は、5</sup> 現<sup>げん</sup> 在<sup>ざい</sup> の大宰府の、<sup>みやこ</sup> ところに、<sup>みやこ</sup> 日都を

遷<sup>うつ</sup> そう<sup>そう</sup> 日と決断されたのであろう。

■ 大宰府の地勢を見て地割が行なわれ、<sup>ちやうどういん</sup> 朝堂院

形式をもつ都が形作られて、<sup>と</sup> と推察

される。<sup>（第497回）</sup> 大宰府（参照）

■ とすれば、一体何故、日本書紀に、

人中大兄は、即位して、<sup>なのおほの</sup> 都を筑紫の<sup>なのおほの</sup> 娜大津

に定められ、<sup>その</sup> その後、大宰府の地に政

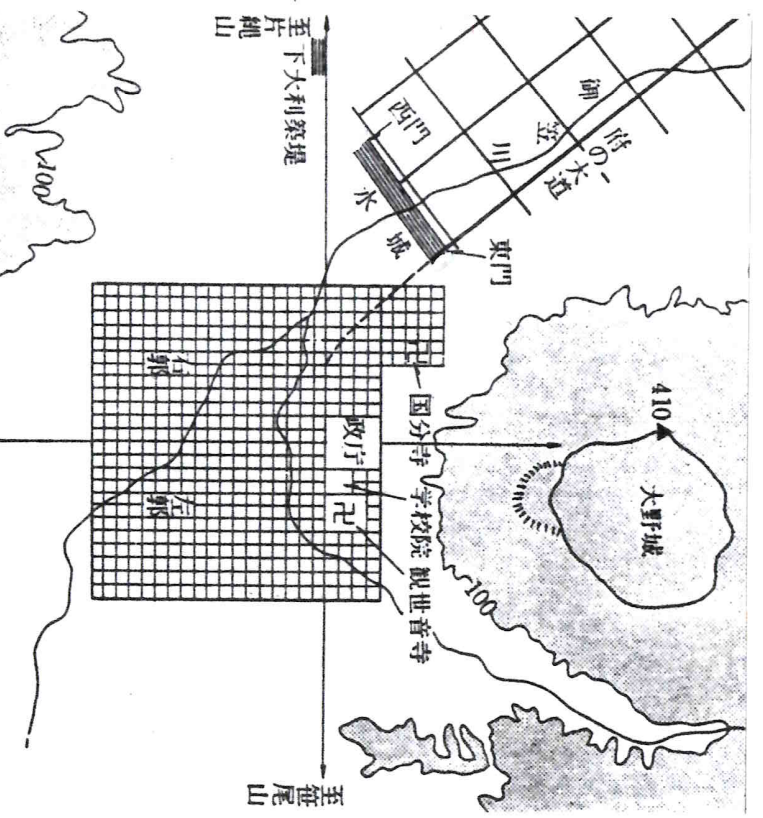
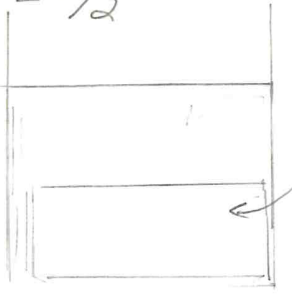
庁をお造りになった。

と、有りのまま<sup>すなわ</sup> 素直に記されなかったの



右頁の右半分  
 上下にわたって掲載。  
 上下に限度一杯はみ出して  
 載せて下さい。  
 山部分を網点にし  
 きれいな網点に  
 変えておいて下さい。  
 (上おひた下)

4,557<sup>P</sup> - 2/2



第497図 遠の朝廷『大宰府』

1304

『大津山』林博通 ニューサイエンス社、昭和59年9月20日発行、39頁参照。

12 本末『大宰府の藤原京型』外郭城は四角形だ、たのてはなろうか。(第20図

4 <当初の平城京構想を参照)

④ 45°55' / 44° 居住区があるという

安養寺(天福宮)日  
 46°08' - 3/5

54  
 22条

横  
 24条

大津山後の集落 大津山大宰府, 84

4,595<sup>P</sup> 144



④ 4532-2/3 天智元年 市 4553-1/2

4,558 P-1/3

記 386 市 4553-1/2 6月22日 6年3月19日 672 667 5

だらうか。

■その理由の詳細について、今、ここにこま

ごまごま述べる。これは非常に困難ながら、

察するところ

△この時（天智元年（六六七）から

五年後の壬申の年（六七二）に勃発する

になる。壬申の乱の際の近江軍（大友皇子

軍）の根拠地は、

口筑紫国の大宰府であつた。

と書き綴るわけにいかなくつたからなのであ

ろう。

と思ひやる。

■真実の歴史が露見しないように配慮して、

あえて、日本書紀は、

「天智元年三月十九日に、都を近

江に遷す。云々」

と述べているように推察される。

■また、日水城、日大野城、日椽城を築い

た後に、日大宰府政庁を作つた、とも

述べにくかつた。と思ひやる。

\*



505



4,558<sup>P</sup>-3/3

Spill 4558<sup>P</sup>-3/3 ④ 4,555<sup>P</sup>  
に足る 94行〜

13.5  
GM

新羅や唐の攻撃を恐れたためだった  
といわれている  
という  
日付へ<sup>きく</sup>鞠智城<sup>ちいじう</sup>が語る東アジアの<sup>てん</sup>視点<sup>てん</sup>✓参照



わさうた  
皇 姓 紀下249  
経26

せい 小林284P  
姓 氏と限用  
やから

4.559P

と  
4553 紀下366  
1/2同文

4550 3P 次々頁5P  
天智天皇は即位され

倭(大和)の京に幸す

天智天皇が、ついに即位され、  
都を定められた時から以後、  
穏な空気が漂うようになった。

前にも述べたように、  
天智紀六年三月十九

日条に、  
都を近江に遷す。是の時、  
都遷すことを願はずして、  
諷へ諫く者多し。

童謡亦衆し。日日夜夜、失火の處多し。  
と記され、  
この記事は、  
天智天皇は、都を(近江に相当する)筑

紫へ遷された。是の時、  
中大兄が天皇となり、  
西の

国に都することとを願はずして、  
諷刺す

る者多く、童謡(人事を諷刺し、時の異変の  
前兆などを暗にうたう歌)も多く、連日連夜

のようには火災が起った

のようには火災が起った

のようには火災が起った



版 948

4,560<sup>P</sup> - 1/2

期間

政事 元1221<sup>P</sup>  
政事 元1221<sup>P</sup>のころから

まか 委す 2066<sup>P</sup>

といった意味なので、はなからうかと思われ。

天智天皇は「こんなにも」特に西の国（九

州地方）において非常な反感をもたれておい

でだったように見受けられる。

「か」ながら、高市天皇在位の期間中（125）つ

まり、東の国の政事を委すおられた蘇我

の期間中に、倭国（近畿地方）に

おいては、中大兄に対する反発がやや薄らい

でいたとであろうか。

こうした状況があったので、天智天皇の御代に

東西二朝の時代が現出することになったのか

も知れない。

＊

「それにしても、

天下の人々が遷都を願わず、諷刺する者

が多く、童謡も多く、また連日連夜火災がお

こつている。

という現実について、どう対処すべきか。

のであろうか。

天智天皇は、冷却期間をおくため、東の



4,560<sup>P</sup> - 2/2

紀下366 1分  
前々頁2分  
④450<sup>P</sup>9分  
天智6年3月1日印主  
7年正月3日

やまのくに  
倭国（大和国）へ赴<sup>おもむ</sup>こうと思<sup>おも</sup>わ  
れなう<sup>か</sup>か<sup>か</sup>たの<sup>で</sup>は<sup>な</sup>知<sup>る</sup>  
天智紀六年（六六七）八月条に、  
皇太子（<sup>ひつぎのみこ</sup>）<sup>い</sup>実は天智天皇と解<sup>かい</sup>すべき<sup>だ</sup>であ<sup>う</sup>  
う、倭の京に幸<sup>あ</sup>す  
とある。

\*



⑤ 4529

富中戦 4705P

紀F366

⑤ 4705P 4540P-2/3

4,561P

次々 577  
次々 977

倭国（大和国）の防備・二朝の構想

天智天皇にとつて 倭国（大和国）は心の  
安まる所であつた

ここに天智天皇は、  
自らはこの倭国（近畿地方）の天皇になり

西の大倭国（九州地方）の天皇として、皇太子  
大友皇子を即位させよう、

とお考えになつた

天智天皇は、早速にも、倭国（大和

国）の防備にとりかかうた。

天智紀六年（六六七）十一月是の月条には、  
是の月に、倭国の高安城・讃吉國の山田  
郡の屋嶋城・對馬國の金田城を築く

とある。既述の如く、  
関門海峡を臨む地に築かれた長門城が



4,562<sup>P</sup>

高安城 磯石 4708<sup>P</sup>

570分の1地図 (中) 4540<sup>P</sup> 3/3  
488m (中) 4706<sup>P</sup>  
4541<sup>P</sup> (中) 4940<sup>P</sup>

唐・新羅軍によって撃破された場合に備え、

倭国(大和国)の防衛強化の爲

安城と屋島城を築かしたのであろう。

なお、奈良県生駒郡と大阪府八尾市との境

にある高安山(四八八メートル)の山頂で、こ

のほど高安城の遺構が見つかつたという。

朝日新聞 昭和五十五年十一月十三日付。

昭和五十七年四月十日付参照 追って詳述

一方、皇太子大友皇子を天皇位に即ける

爲、天智天皇は、再び船上の人となり

西の大倭国(九州)へと増え渡ってゆかされた

ように想像される。

こうして是の年(天智六年、西暦六六七年)

は、慌だしく暮れていった。

\*



壬申 672 25寸  
 壬申 668 21寸  
 壬申 664 17寸  
 壬申 660 13寸  
 壬申 656 9寸  
 壬申 652 5寸  
 壬申 648 1寸  
 壬申 644 1寸  
 壬申 640 1寸  
 壬申 636 1寸  
 壬申 632 1寸  
 壬申 628 1寸  
 壬申 624 1寸  
 壬申 620 1寸  
 壬申 616 1寸  
 壬申 612 1寸  
 壬申 608 1寸  
 壬申 604 1寸  
 壬申 600 1寸  
 壬申 596 1寸  
 壬申 592 1寸  
 壬申 588 1寸  
 壬申 584 1寸  
 壬申 580 1寸  
 壬申 576 1寸  
 壬申 572 1寸  
 壬申 568 1寸  
 壬申 564 1寸  
 壬申 560 1寸  
 壬申 556 1寸  
 壬申 552 1寸  
 壬申 548 1寸  
 壬申 544 1寸  
 壬申 540 1寸  
 壬申 536 1寸  
 壬申 532 1寸  
 壬申 528 1寸  
 壬申 524 1寸  
 壬申 520 1寸  
 壬申 516 1寸  
 壬申 512 1寸  
 壬申 508 1寸  
 壬申 504 1寸  
 壬申 500 1寸  
 壬申 496 1寸  
 壬申 492 1寸  
 壬申 488 1寸  
 壬申 484 1寸  
 壬申 480 1寸  
 壬申 476 1寸  
 壬申 472 1寸  
 壬申 468 1寸  
 壬申 464 1寸  
 壬申 460 1寸  
 壬申 456 1寸  
 壬申 452 1寸  
 壬申 448 1寸  
 壬申 444 1寸  
 壬申 440 1寸  
 壬申 436 1寸  
 壬申 432 1寸  
 壬申 428 1寸  
 壬申 424 1寸  
 壬申 420 1寸  
 壬申 416 1寸  
 壬申 412 1寸  
 壬申 408 1寸  
 壬申 404 1寸  
 壬申 400 1寸  
 壬申 396 1寸  
 壬申 392 1寸  
 壬申 388 1寸  
 壬申 384 1寸  
 壬申 380 1寸  
 壬申 376 1寸  
 壬申 372 1寸  
 壬申 368 1寸  
 壬申 364 1寸  
 壬申 360 1寸  
 壬申 356 1寸  
 壬申 352 1寸  
 壬申 348 1寸  
 壬申 344 1寸  
 壬申 340 1寸  
 壬申 336 1寸  
 壬申 332 1寸  
 壬申 328 1寸  
 壬申 324 1寸  
 壬申 320 1寸  
 壬申 316 1寸  
 壬申 312 1寸  
 壬申 308 1寸  
 壬申 304 1寸  
 壬申 300 1寸  
 壬申 296 1寸  
 壬申 292 1寸  
 壬申 288 1寸  
 壬申 284 1寸  
 壬申 280 1寸  
 壬申 276 1寸  
 壬申 272 1寸  
 壬申 268 1寸  
 壬申 264 1寸  
 壬申 260 1寸  
 壬申 256 1寸  
 壬申 252 1寸  
 壬申 248 1寸  
 壬申 244 1寸  
 壬申 240 1寸  
 壬申 236 1寸  
 壬申 232 1寸  
 壬申 228 1寸  
 壬申 224 1寸  
 壬申 220 1寸  
 壬申 216 1寸  
 壬申 212 1寸  
 壬申 208 1寸  
 壬申 204 1寸  
 壬申 200 1寸  
 壬申 196 1寸  
 壬申 192 1寸  
 壬申 188 1寸  
 壬申 184 1寸  
 壬申 180 1寸  
 壬申 176 1寸  
 壬申 172 1寸  
 壬申 168 1寸  
 壬申 164 1寸  
 壬申 160 1寸  
 壬申 156 1寸  
 壬申 152 1寸  
 壬申 148 1寸  
 壬申 144 1寸  
 壬申 140 1寸  
 壬申 136 1寸  
 壬申 132 1寸  
 壬申 128 1寸  
 壬申 124 1寸  
 壬申 120 1寸  
 壬申 116 1寸  
 壬申 112 1寸  
 壬申 108 1寸  
 壬申 104 1寸  
 壬申 100 1寸  
 壬申 96 1寸  
 壬申 92 1寸  
 壬申 88 1寸  
 壬申 84 1寸  
 壬申 80 1寸  
 壬申 76 1寸  
 壬申 72 1寸  
 壬申 68 1寸  
 壬申 64 1寸  
 壬申 60 1寸  
 壬申 56 1寸  
 壬申 52 1寸  
 壬申 48 1寸  
 壬申 44 1寸  
 壬申 40 1寸  
 壬申 36 1寸  
 壬申 32 1寸  
 壬申 28 1寸  
 壬申 24 1寸  
 壬申 20 1寸  
 壬申 16 1寸  
 壬申 12 1寸  
 壬申 8 1寸  
 壬申 4 1寸  
 壬申 0 1寸

大友皇子 おほとものみこ  
即位 すかん

二朝の現出

多くの人々の反対を押しきって、天智天皇  
 は、皇太子大友皇子を天皇の位にお即けにな  
 ったのであろう。

天智紀七年（六六八）正月三日、七日条に、  
 七年正月三日、  
 皇太子即天皇位す。或  
 本に云はく、下、六年三月に位に即きたまふ。七  
 日に、群臣に内裏に宴したまふ。L

とある。

恐らく、この記事は、

山 六年三月に、皇太子中大兄加即位之水

又七年正月三日、皇太子大友皇子加<sub>ハ</sub><sub>リ</sub>遠の朝。

延喜(大宰府)の天皇として即位された。

という意味なのであろう。

つまりここに、  
長らく中断  
して

友二報時代加再現小説ように思わさ

な  
お、  
懐  
因  
藻、  
大友皇子伝に、

壬申の年（六七二）の乱に会ひて、天命

時  
に  
年  
二  
十  
五

とある  
従って、  
逆算すると



論 小林 909  
②40 同文

4563 P-3

さんだん  
纂奪 元926  
②

同文  
④4551 紀下586  
15行  
④4569 6行

天つま  
改行

△大友皇子は、二十一歳の時に即位された。  
よう、と推察される。  
なるほど、大友皇子の即位について、日本  
書紀は何も述べていないが、前田家本  
西宮記裏書をはじめ、平安時代以降のいくつ  
かの史料に、大友皇子の即位の記載がある。(既述)  
△こうしたことから、従来、大友皇子は天智天皇崩後即位し、日本書  
紀も元来は壬申の年を大友天皇紀として立て  
いかし、書紀の編者舎人親王が父天武天皇  
に皇位の篡奪者としての汚名をきせるのを避  
けるため、曲筆を加え、故意に大友皇子即位  
の事実を削除し、天武天皇紀に編入した。  
とする主張が、江戸時代、大日本史などによ  
って主張された。  
△そして明治三年(一八七〇)明治政府は大友  
皇子の即位説を正式に認めて、弘文天皇と  
と諡し、歴代天皇の中に加えたのだった。  
(「日本書紀」(F)日本古典文学大系、岩波書  
店、五八八頁補注二八一三。「日本史辞典」



「公解苑」へ大日本史

東京創元社へ大友皇子

参照

■もつとも「この物語では「理解」やすいように  
に<sup>12.5</sup>弘文天皇でなく<sup>12.5</sup>大友天皇と記述す<sup>12.5</sup>  
る<sup>12.5</sup>。としよう。

■また、大友皇子の即位後の経緯は、破乱  
に満ちた複雑極まりないものだったように想  
到されるが、——ここでは詳しく述べな  
ないので、追々触れてゆくことにしよう。

米



②  $4516^{\frac{1}{2}}$   $4509^{\frac{1}{2}}$   $\frac{1}{2}$   $4645^{\frac{1}{2}}$   $4752^{\frac{1}{2}}$  井桑略記 60<sup>p</sup>

大 海 人 皇 子 の 立 太 子

方、先に球へたように、大海人皇子の立

太子  
に  
つ  
い  
て  
日  
扶桑略記  
天智七年二月二十

三  
日  
条  
仁  
天  
智  
七  
年  
二  
月  
二  
十  
三  
日

「以」大<sub>ニ</sub>海皇子<sub>ヲ</sub>立<sub>ス</sub>皇太子<sub>ト</sub>。天武天皇是也。

と記さず  
下川  
る  
第  
十三  
章  
大星  
第  
の項に  
おいて  
既述

たぶん

大友皇子が即位した天智七年（六八八）

正月三日の翌月の二月二十三日、大海人皇子

は皇太子の位におつきになったのもあろう。

と思ふ。〔第八十三章〕  
高市天皇  
大

皇弟の項において既に

天智天皇は、  
もゝかゝたら、

八日 遠の朝廷に（大宰府）の大友天皇を補

佐々木 三郎 天智天皇の同母弟である大海

人皇子を皇太子とされた

の  
か  
も  
知  
れ  
な  
い

と  
木

① 天智七年正月三日、大友皇子加即位於小

② その直後の二月二十三日、大海人皇子が

皇太子の位につか  
たと考えてみたい。



那津官家と大宰府について

大友天皇は、天智七年（六六八）正月三日

に即位されたといえ、大宰府の政庁

が完成するまでの間、大津宮にあるいは

鞠智城に留まっておられたのではなかつたう

うか。

門（朝堂院内を南北二つに分断する門）・南門・中

・正殿・後殿を備えた一大都城が出現した

と想察される。西都大宰府に藤井明徳

日本放送出版協会、五五頁参照

因みに述べると、大宰府を現在の位置に設けたこ

とについて、次のような見解がある。

白村江の敗戦後、政府は一方では壱岐

対馬・筑紫等の辺に防人を配置し、車路用

の烽（のろし）を設け、こ小まで博多湾の岸

官家は朝廷・天子のまへ

たのろし

那津官家と大宰府について

おほい

大宰府の政庁

大津宮

の

南門・中

朝堂院

内裏

西都大宰府

五五頁参照

\*

大宰府

大宰府

大宰府

大宰府

大宰府



① 北城大群を、豫成を築いた後、大軍群を作ったと考えた小島。

遺唐使 21<sup>P</sup>

H 11.11.13 (7)

4.566<sup>P</sup>

次頁  
から

と  
い  
う  
の

② また、日大<sup>たいがいの</sup>宰府<sup>さいふ</sup>の性<sup>せい</sup>格<sup>かく</sup>についで、次<sup>つぎ</sup>のよ

基<sup>き</sup>肆<sup>い</sup>城<sup>じょう</sup>等<sup>ら</sup>が  
 構<sup>こう</sup>築<sup>ちく</sup>され  
 たの  
 だろ  
 う  
 ✓  
 へ  
 白<sup>はく</sup>村<sup>そんの</sup>  
 江<sup>え</sup>の  
 敗<sup>はい</sup>戦<sup>せん</sup>後<sup>ご</sup>  
 大<sup>だい</sup>宰<sup>ざい</sup>府<sup>ふ</sup>  
 ・  
 水<sup>みづ</sup>城<sup>き</sup>  
 ・  
 大<sup>おほ</sup>野<sup>の</sup>城<sup>じょう</sup>

さらに又一回大宰府の性格について、次のように考えられている。

つまみ

遣唐使  
L 森克己、  
至文堂、  
二一頁參照

築するなど、防衛準備に狂奔して、万に備えた。へと移し、その周りに水城や百済式山城を構

海<sup>かい</sup>岸<sup>がん</sup>線<sup>せん</sup>より引<sup>ひ</sup>き下<sup>さ</sup>げて、  
大<sup>だい</sup>宰<sup>さい</sup>府<sup>ふ</sup>の跡<sup>あと</sup>のある地<sup>ち</sup>矣<sup>ん</sup>、  
近<sup>かい</sup>くにあつた政<sup>せい</sup>府<sup>ふ</sup>重<sup>じゅう</sup>要<sup>よう</sup>機<sup>き</sup>関<sup>かん</sup>の口<sup>くち</sup>大<sup>だい</sup>宰<sup>さい</sup>府<sup>ふ</sup>を、



H5.8.16(月)  
H11.11.13(土)

西都大宰府 28<sup>6</sup> 65行  
20<sup>P</sup> 25行  
次頁 8行 赴定

西都大宰府 27<sup>P</sup>

前頁

4567<sup>P</sup>  
継承としての筑紫大宰も同位置に考えられる  
という。(「西都大宰府」日本放送出版協会、藤  
井功、二七〜二八頁参照)

\*

「推古から斉明の間に筑紫大宰の官衙が置  
かれていた位置はわからない。  
すなわち、現在の太宰府町に太宰府政庁が  
造営されたのは天智年間のことであつて、それ  
をさかのほりうる資料は考古学的にも確認で  
きない。  
その推測されるところは、――――博多湾  
に面した那津官家付近である。これは性格  
上、軍事基地的な要素がつよく、那津官家の



この頁左!

博多 はかた

近江の天津宮について  
筑紫の大津宮（大宰府）と

い  
う  
ま  
で  
も  
な  
く  
下

て、同年三月十九日に筑紫の博多(博多)の天津宮へ遷都す

大友皇子が翌年の天智七年（六六八）

正月三日（あけふ）に即（すなは）位（い）し  
大宰府（だいさいふ）を都（みやこ）と（な）した

なとと  
あまリにも常識を逸脱して

る  
よ  
う  
で  
あ  
る。

2 今日では、通常、

皇子中大兄が、天智癸卯六年三月十九

日に近江（滋賀県）の大津宮に遷都さし、

年の天智癸卯七年正月三日に即位す小左

と  
考  
え  
ら  
れ  
て  
い  
る  
か  
ら  
で  
あ  
る。

この二者間の違ひは、極端すぎる。

大宰府 だいざいふ

た  
か  
に  
↑

天智朝に、大宰府は「都」として作られた

と云えは  
一見すいぶん  
唐拍子もない

居<sup>キヤ</sup>であるはずの「後<sup>ゴ</sup>殿<sup>テン</sup>」(内<sup>ない</sup>裏<sup>り</sup>)や、朝<sup>ちやう</sup>政<sup>せい</sup>を天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>の住<sup>す</sup>



改正

判断

（こ）

万葉283  
元1585

4,569P

(採本)P  
万1-165P  
万2-57P  
万2-159P

万4-85P  
万4-237P

万4563-73 339  
遠の朝廷 1584P  
遠の朝廷 4623

行なう場である「朝堂院」までも設けられた大  
宰府か、曰「都」以外の目的で作られたと解釈  
するこの方がおかしいのではなからうか。

■「かも、よく知られているように、大宰府  
は別名曰「遠」の朝廷とも称されたのだった。

■なるほど、この当時、  
「遠」の朝廷は、都より遠く派遣せられ  
て朝政を行なう機関。大宰府や國司をいひ、又  
遣新羅使をもいった（例えば、万三十三〇四。万五  
十七九四。万六十九七三。万十五一三六八八  
万十七一四〇一一等）

という。（「萬葉集事典」佐佐木信綱、平凡  
社へとほのみかど。」「玄辞苑」へ遠の朝廷  
参照）

■だから、大宰府のことを曰「遠」の朝廷と呼  
称するといっただけのこと、単純に、  
へ大宰府は、都として作られた✓

と判断するわけにはいかならない

■「他の所はともかく、大宰府は時代を越え  
て万人から曰「遠」の朝廷と呼べられ、親しまれ



4,570

てきたのだった。

① 恐らく、大宰府は、

本来、天智天皇が、御自身の都とする為

建設されたものなのだから、格調

高く、口後殿（内裏）や口朝堂院をも備

えているのであろう。（第八章「大津宮」の項参照）

② もっとも、完成してからは、東の大

和国の天智天皇の都が「首都」

西国の大友天皇の都が「副都」とされたのだらう。

③ この時の二朝時代はすぐに消滅したものの、それ以後も

大宰府は重要視され続けた。

と思われ（第一巻末尾の年表、六十六年参照）

■ そうした歴史的背景があったから、古来々

大宰府のことを特別に親しみを込め、口遠く

の朝廷と呼び、口推察される。

ことに、天智天皇にゆかりの深い藤原氏に

とって、口大宰府は格別大きな意味を持っ

ていたに相異なるい。

慣わししているように

＊



④2767-2/3 小林 656'

1町=約109m  
31町長1町 (元144町 1町=60町)

4,571'

走っている ④4409'  
④4595' 日本の方史(2) 読売 249' 概要 ④4574'

大宰府の都市計画は、政庁である都府楼を  
北端の中心として設計された。第497回大宰府参照  
この都府楼からまっすぐ南のほう、ちよう  
どいまの二日市の方へ向かって平城の朱雀大  
路に相当する大路がのび、その東の区画を左郭  
西を右郭と呼び、この左右両郭を、南北に走  
る道路によって坊に分け、東西に走る道路で  
条に分けた。  
ここにち復元し得たところでは、東西二十  
四坊、南北二十二条の大きさがある。  
この条と坊で区切られた正方形、すなわち  
一坊の広さは一町(約一〇九坪)四方で、全  
体としては、奈良京の三分の一ほどの広さが  
あったようである。  
そして、このような大宰府は、天智天皇の  
時に造られたという説が多い。(「日本の歴  
史」(2)飛鳥と奈良、読売新聞社、二四九頁参  
照)

米



大津川  
改行

117P

大津川

4,572P

みなりか  
市町村名大鑑  
63P  
錦織所

紀下581P

45682

近江(滋賀県)の大津宮

では、今日通常、近江の大津宮に

があったろう、と考えられている。近江国に

(滋賀県)の方をみてみよう。

■近時、大津宮に擬せられる滋賀県大津市南

滋賀町で、白鳳時代の寺院跡が発掘されたものの

宮跡とは認められなかった。(「日本書紀」下)

日本古典文学大系、岩波書店、五八一頁参照)

■また、大津宮は、大津市の錦織の地にあったの

であらう。

との判断から、現在発掘調査が進められている。

しかしながら、これまでのところ、柱穴などの

遺構が左右対称の位置に検出された例はな

く、朝堂院の遺構も発見されていなり。

・そして、錦織で検出された建物跡では、火

災にあった痕跡、たとえば焼土とか炭・灰と

いった類を何ら見出せず、かてきず、大半の

建物に柱抜き取り痕が認められた。これは柱

が再利用されたことを意味しており、「大津

の

天智十年(六七二)十月二十四日の火災

ケ-20 20X20  
4584569 紀下380a794  
4584569

523

たろう

であらう



→ 563.11.26(土)  
49.3.21(金)

4,573<sup>P</sup>

ひと

大津京 131<sup>P</sup>

宮焼亡について

否定せざるを得ない。

発掘調査の結果から

いえは

さらに、錦織一帯は、極めて狭長で、ま

まっただ平地が得られ、地形であるため、基

盤目状の街並みを方形に形づくるのは不可

能である。

つまり、関連官衙や、市、宅地などを、琵琶

湖畔に沿って細長く分散的に置かざるをえ

ないことになる、という。→大津京、林博

通、ニュー・サイエンス社、一一一、一一七

一三一頁参照

結論を出すのは未だ時期尚早ながら

多分

→近江国(滋賀県)に、大津宮は、造営さ

れたことはなかったであろう

と思われる。

\*